

ラジオ体操の地域社会学

——「緩やか」に繋がる人々のエスノグラフィ——

宮地 俊介・中野 航綺

本稿の目的は、集団としてのルールが緩く、メンバーシップが無くとも定期的に参加できる「緩やか」な集まりが、どのように維持されているのかを明らかにすることである。本稿では根津神社境内におけるラジオ体操を事例として、活動をその現場の空間的な性質と不可分のものとして捉える立場から、エスノグラフィを行った。その結果、(1)人々が参加理由の違いに基づいて自然と棲み分けを行ったり、体操の相互チェックを会話の資源として用いたりすることで、活動現場が運動だけでなく交流を行える場所として維持されていることがわかった。また、(2)神社境内という空間が、集まって活動できたり、ルーティン的な参拝や散歩の途中で人々と簡単なコミュニケーションをとれたりする場所として意味づけられていることもわかった。地域の「緩やか」な繋がりを持続を、活動や空間の性質から考察した本稿の知見は、「居場所」づくりの実践にも示唆を与えるものだろう。

1 問題設定

私たちの身の周りには、集団としてのルールが緩く、メンバーシップが無くとも、定期的に参加できるような集まりが数多く存在する¹。本稿の目的は、この「緩やか」な集まりがどのように維持されているのかを、その活動と、活動が行われる現場の空間的な性質から明らかにすることである。

この「緩やか」な集まりの典型的な対象として、本研究ではラジオ体操を取り上げたい。ラジオ体操といえば、NHK ラジオで毎朝6時30分から放送される体操として広く知られている。その特徴は「いつでも、どこでも、だれにでも」できることにあるとされ、日本全国に体操会などの集まりが組織されている²。

先行研究の多くは、人々のラジオ体操の参加を、地域との関わりによって説明してきた(統計研究会 2009)。本研究の調査でも、体操会の運営に関わる参加者たちは活動を続ける理由が「地域のため」であるとししばしば語った。あるいは、もともと参加していた活動が新型コロナウイルス感染症の拡大によって中止になり、新たな地域の拠り所を求めてラジオ体操に参加し始めたと語るインフォーマントもいる³。

しかし、ここで語られる「地域」とは何なのだろうか。人々はその言葉を、必ずしも参加者どうしの繋がりのみを意味して用いているわけではないと考えられる。

たとえば本研究の調査では、仲が良い数人の友人以外は他の参加者の名前さえ知らないというインフォーマントや、現場では挨拶以上の会話を交わすことはないというインフォーマントは少なくなかった。体操会の活動を町内会などが担うケースもあるが、本研究の事例のようにそれらの組織と直接の関わりがない体操会では、体操以外に目立った集団的活動が行われない場合も多い(統計研究会 2009; 村本 1999)⁴。むしろラジオ体操の特徴は、その活動が15分という時間、会場という空間限りのものであり、他の参加者との強固な人間関係を持たない人々も含め、誰でも気軽に参加できる「緩やかさ」にこそある。

これらのことを踏まえて注目したいのは、活動が行われる現場の空間的な性質である。ラジオ体操は、体育館や公民館のような壁で囲まれた空間ではなく、たまたま散歩中の人に見かけられたり、音が聞こえてきたりするような視覚的・聴覚的に開かれた空間で行われる場合が多い。このような性質は、その会場を生活圏に含む人々がラジオ体操の存在を知り、参加するようになる重要な要因になっていると考えられる。

ただし同時に、会場は公園や神社という形で、敷地として周囲から区切られた空間でもある。そのため、参加者の振る舞いにはその場所に即した一定の配慮が存在することも考慮しなければならない。

つまり、ラジオ体操は敷地として区切られる1つの空間で行われ、またその現場が人々の生活圏というより広い空間のなかに位置づけられてもいるという意味で、いわば二重の空間的性質をもっている。そして、人々が「地域」という言葉で語ったリアリティを踏まえるためには、「緩やか」な人間関係を、それを実現するような現場の二重の空間的性質と合わせて把握する必要がある。

本研究は以上の問題関心から、ラジオ体操を対象に、活動を現場の空間的性質と不可分のものとして捉え、それらが「緩やか」な集まりの維持にどのように結びついているのかを分析、考察するものである。このような目的に即して、本研究では調査方法としてエスノグラフィを用いた。次節では先行研究を整理し、本研究の立場と位置づけを明示したい。

2 先行研究の整理と本研究の立場

2-1 先行研究①——ラジオ体操とコミュニティ

初めに、本稿と同じく、ラジオ体操の集まりの「緩やか」な性質と地域の間関係を考察した先行研究として、統計研究会の調査報告書（統計研究会 2009）を検討する⁵。この報告書は、ラジオ体操の集まりが、過度な馴れ合いを避けつつも他の参加者との連帯感を持てる「極めて現代的なコミュニティ」を形成するという仮説のもと、体操参加者への大規模なアンケート調査（1486人）と聞き取り調査（8事例）を行ったものである（統計研究会 2009: 1-4, 179-80）。

アンケート調査からは、ラジオ体操の参加動機のうち、もっとも中心的なものは「健康維持」であるが、「仲間との交流」を求める参加者もかなり多いことが示されている。統計研究会はこれらのデータをもとに、ラジオ体操が「非常に緩い形で」「コミュニティ」を形成することが、ある程度までは推測できると述べている（統計研究会 2009: 179-91）。

しかし、本稿の関心に照らすと、その議論には問題点を指摘できる。まず、統計研究会自身が指摘している点であるが、調査結果からはラジオ体操がコミュニティ形成の要因であるとはまではいえない。つまり、ラジオ体操によって地域のコミュニティ形成が促進されているのか、もともと強固なコミュニティがある地域だからこそラジオ体操の活動も盛んであるのかは調査結果から特定できなかったのだという（統計研究会 2009: 180）。また、そもそもこの議論ではコミュニティという概念を厳密に定義しているわけではないため、どのような状態であれば仮説が検証されるのかも十分に明らかではない⁶。

しかし本研究の場合、この問題に対し、コミュニティ概念を厳密に定義することや、その

形成の因果関係を厳密に説明することが適切な解決策であるとも考えられない。というのは、「共同性」という最低限の要件にのみ絞ってコミュニティを定義しても⁷、集まりが「緩やか」で、その時間・その場所のみに限られるラジオ体操の性質を捉え損なうことが懸念されるためである。

また、そのような性質を適切に捉えるためには、アンケートや聞き取りのみではなく、実際に活動が行われる現場に参加して洞察を行わなくてはならないだろう。そこで本稿では、ラジオ体操の活動がどのように成り立っているのかについて、エスノグラフィを通して考察した村本（1999）を参照したい。項を改め、その内容を重点的に検討しよう。

2-2 先行研究②——ラジオ体操のエスノグラフィ

村本（1999）は、都内のある公園で毎朝行われている30-40名ほどのラジオ体操を事例に参与観察・インタビュー調査を行ったエスノグラフィである。その研究目的は「集団」と「集合状態」の間に位置づけられるような、既存の学術概念では捉えるのが難しい「中間的存在の集合体」の特質を把握し、記述することである。

村本によれば、ラジオ体操の集まりは、一緒に体操するという共通目標を持っていることや、参加者が暗黙のうちに定位置を決めたり、挨拶を交わしたりするという規範が軽微ながらも存在する点で「集団」としての特性をもつ。一方で、参加メンバーの所属がはっきりしない点や、規範から逸脱したメンバーや部外者が排斥されないという点で、その集まりは「集団」というより単なる「集合状態」としての特性をもっている（村本1999: 181-95）。

村本はラジオ体操という「集合体の求心力の源泉」は、この集団とも集合状態とも言えない性質にあると推測する。すなわち、体操の現場には「共有できる場所と時間という機会が提供されているだけ」であり、参加者は「特定の社会的アイデンティティ」を要請されることはないし、「守る規範のレベルも人それぞれで」よく、「他者との相互作用を一切行わなくともよい」。村本は「この寛容さが、長年にわたって多くの人々を引きつけている原因であると思われる」とまとめる（村本1999: 193）。ここで指摘された「寛容さ」は、本稿では「緩やかさ」と言い換えることもできるだろう。

ここでは村本の知見をうけて、更に取り組みされるべき課題を2つ挙げるができる。第一の課題は、その「寛容」＝「緩やか」な集まりが、どのように維持されているのかを明らかにすることである。村本（1999）では、集まりの「寛容さ」が参加者の振る舞いにどのように表れており、また、その振る舞いが現場を維持することにどのように結びついているのかまでは説明されていない。

この点に関連して、第二の課題は、活動が行われる空間の性質を踏まえることである。ここまで見てきた通り、ラジオ体操には強制力のあるルールや、強固な人間関係が必ずしもあるわけでもない。それにもかかわらず人々が毎日そこに集まるのであれば、活動内容や人間関係だけではなく、会場の空間的な性質も、活動が続けられるうえで無視できない要素になっていると考えられる。

ここまでの内容を小括する。先行研究も、ラジオ体操の集まりの「緩やか」さに着目してきたが、その「緩やか」な現場がどのように維持されているのかは十分に説明してこなかっ

た。この点を説明するためには、参加者の振る舞いを現場の空間的な性質も踏まえて捉える必要がある。

2-3 本研究の立場——「場」概念を用いた地域社会学

ここまでの議論をうけ、本研究では「緩やか」な活動を現場の空間的な性質と不可分なものとして捉えるために、「場」という概念を用いたい。「場」は様々な分野において様々な意味で使われてきた概念である。本研究では、コミュニティという概念で捉えきれないような、活動の「緩やか」さや空間的な性質を把握するための概念として「場」を用いる。

まず、村本（1999）のようにラジオ体操を「集合体」と概念化すると、活動現場の空間的な性質が後景化してしまいやすいことを確認しておこう。このことは「趣味縁」や「ネットワーク」概念を用いる場合にも当てはまるといえる。ただし、地域社会学で使われてきたような「群衆」や、祭礼などのイベントを指す概念も、ラジオ体操の実態を捉えるうえで十分なものであるとは考えにくい。

そこで注目したいのは、「場」概念を用いることによって、人々の関係性を、その空間的な性質を踏まえて対象化した武岡暢の地域研究（武岡 2017）である⁸。武岡は、地域社会研究を掲げてきた従来の研究が「主体」や「集団」にのみ関心を集中させてきたことへの批判意識のもと、「それらの編成を成り立たせ、規定し、〔それらと〕相互作用する」街路や建築などの「物理的空間の社会的な側面」として「場」を定義する。そのうえで「ネットワークという人間関係論に地域社会を解消してしまうのではなく、むしろ地域社会を通じて社会の空間性にアプローチできること」をもって、「地域社会の社会学」という立場を掲げている（武岡 2017：41-3、□内は引用者注。以下の引用部においても同様）。

武岡が「場」という概念を用いたのは、自らの研究対象である歓楽街（盛り場）という広がりや集積を対象化するためである。ただしその要点が、人々の活動や相互作用を、それが行われる空間の性質と不可分のものとして捉えることにあるとすれば、本稿もその概念を引き継ぐことが出来るだろう。

改めて本稿の課題は、ラジオ体操の集まりを典型例として、人々が「緩やか」に関係性を取り結ぶような「場」がどのように維持されているのかを明らかにすることである。その際に、人々が「地域」という言葉を使って表現したリアリティを——コミュニティ概念とは異なる観点から——踏まえるという意味で、本稿は地域社会学という立場を掲げたい。

3 調査の概要

3-1 調査の方針

ここまでの議論をうけて本研究では、人々が「場」に参加する理由はなにか、それらの参加理由が「場」における振る舞いにどのように表れているのか、それらの振る舞いが「場」の維持にどのように結びついているのかを調査した。

「場」への参加理由については、とくに人々が「地域」という言葉に関連づけて語ったものの析出を図った。議論を先取りすると、それは(1)人々との交流を図るため、(2)根津神社とい

う空間に見出される意味のため、の2つである。

(1)について、ラジオ体操の現場では、体操の前後に歓談したり、軽い世間話をしたりする参加者の姿がよく観察される。実際、インフォーマントの口から「地域の交流」という言葉でラジオ体操を訪れる理由が語られることは何度かあったし、他の参加者と交流することが重要な参加動機であること自体は先行研究が既に指摘している（統計研究会 2009）。そこで、以下ではこうした参加理由のことを「交流」と呼ぶことにしたい。本研究ではこの「交流」が現場での振る舞いにどのような形で表れていて、それが「場」の維持にどのように結びついているのかまで明らかにすることを目指す。

(2)については、先行研究では十分に議論されてこなかった。だが、ラジオ体操が「交流」を積極的に志向しない参加者も訪れることのできる「場」であることを考慮すれば、人々がその空間をどのように意味づけているのかも明らかにしなければならない。

このように、本研究では「場」がどのように維持されているのかを説明するために、(1)活動や参加者のネットワークに関するもの、(2)活動が行われる空間に関するものという2つの側面から、「場」への参加理由と振る舞いを調査した。本稿では4節で(1)について、5節で(2)について、それぞれの調査結果の分析と考察を行う。

3-2 事例となる「場」について

本研究が調査を行った事例は、根津神社境内で活動する文京区根津神社ラジオ体操会の現場である。その毎回の参加者は数十名から100名ほどで、中心的な参加者は高齢者層だが、若い親子連れなども参加していることが確認できる。正確な開始時期の記録は確かめられていないが、インフォーマントの語りや関連設備の銘板などからは、遅くとも戦後には活動があったことが推測される。

本研究では、いくつかの体操会で予備調査を行ったうえで、同会の活動現場を事例に選んでいる。村本（1999）が扱った事例とは異なり、同会には会計や指導部などの役職や会員名簿があり、毎日の継続的な参加者からは参加費（1000円/年）を徴収してもいる⁹。それにもかかわらず、このような組織的な性格が「場」における活動にはほとんど表れていないように観察された。また、同会の現会長は町内会の副会長も兼ねているが、体操会自体は町内会から独立しており、実際、参加者の居住地は複数の町内会区域にまたがっている¹⁰。これらの性質のために、根津神社ラジオ体操会は「緩やか」な活動現場がどのように維持されているのかを説明するうえで適格な事例であるように考えられた。加えて、神社境内が活動場所になっていることは、公園などの場合よりも、人々の「場」における振る舞いにその空間の性質を踏まえた配慮が表れやすいと考えた。

また、本研究では予備調査として文京区の職員2名にフォーマル・インタビューを行い、活動や神社境内の使用をめぐる行政との関係についても確認している。根津神社ラジオ体操会をはじめとする文京区のラジオ体操会は区の公認組織だが、職員へのインタビューからは「長い歴史もありますので、その中でやってくださっているところだと思っています」との発言も得られるなど、行政からの支援や介入等は行われていないことが確かめられている¹¹。本研究では、その意味で参加者たちによる自主的な性格が強いものとして「場」の維持を検

討したい。

3-3 調査の方法

本研究では継続的な参与観察とフォーマル・インタビューを組み合わせで行った。参与観察だけでは推測が不十分と考えられた知見はフォーマル・インタビューによって裏付けを与え、フォーマル・インタビューだけでは把握しきれない現場のニュアンスは参与観察に基づく洞察を行った。それぞれから得られたデータは2段階のコーディングによってトピックごとに分類、整理している。

参与観察については、2021年4月19日に体操会の会長から調査の許可をもらった。同月22日には会場に集まった参加者に調査の趣旨を説明し、それから2021年12月まで、調査者それぞれが約50回ずつ調査に訪れている。この期間には新型コロナウイルス感染症拡大に伴う緊急事態宣言やまん延防止等重点措置が発令され、後述のように根津神社ラジオ体操会も1回目の宣言発令時に活動を休止している。それ以降は十分な距離を取るなど感染対策を行った上で活動が再開されており、調査者も感染対策を行ったうえで調査に臨んでいる。5節ではこれらの出来事が「場」の形成にもたらした影響にも言及する。

根津神社ラジオ体操会の活動は朝の6時25分から、毎日ほぼ同じ形で行われる。その内容は以下の通りである。

みんなの体操（4分半）

補助体操

ラジオ体操の歌

ラジオ体操第一（3分強）

首の運動および補助体操

ラジオ体操第二（3分強）

調査者は体操が始まる5-20分ほど前に会場に到着し、参加者と一緒に体操をして、体操後しばらく話を聞いてからそこを後にした。現場の様子や聞き取った内容はその場でメモを取り、帰宅後フィールドノートにまとめ直した。

フォーマル・インタビューは、前項で触れた文京区職員（7月）と、根津神社ラジオ体操会において中心的な役割を果たすA氏、B氏、C氏（12月）に対して行った。いずれも筆者2名の同席のもと、1時間から2時間にかけて、活動と地域の関わりについて半構造化インタビューで訊ねている。

A氏は根津神社ラジオ体操会の会長を務める男性、B氏は根津神社ラジオ体操会の会計を務める女性、C氏はお手本として最前列中央で体操を行う男性である。A氏のインタビューはA氏の自宅において、B氏のインタビューは会食時に、C氏のインタビューは筆者らが所属する大学のオープンスペースでそれぞれ実施した。

これらのインタビューは、録音されること、答えたくない質問に答える必要はないこと、調査や録音は中断できること、後に文字起こしデータおよび本稿の内容確認を行い、削除を希

望する部分は削除できることをそれぞれ確認し、同意のもとで行った。B氏については録音の承諾を得ることが出来なかったため、その場で可能な限りメモを残し後日整理した。本稿では、参与観察のデータでインフォーマントに振られるアルファベットはインタビューのそれと対応しており、インタビューに登場しないインフォーマントの場合は登場順にアルファベットを振っている。

4 地域のなかの「場」(1)——「交流」の舞台として

本節では、「交流」という参加理由に着目し、それに基づく振る舞いと「場」の維持との結びつきを明らかにしたい。以下で見えていくように、体操や健康維持をストイックに突き詰めることが「場」に参加する理由であるような人々は少なくはない（以下、このような参加理由を「運動」と表記する）。これらの参加者は、気楽な「交流」目当てで「場」を訪れる参加者とは、一見、相容れないようにも映る。この点を踏まえて本研究では、ラジオ体操が地域の「交流」のための「場」になっていると単に結論づけてしまうのではなく、「交流」の内実がどのようなものであり、また、相反するようにも見える参加理由がどのように共存可能となっているのかも説明したい。そのために、まずは「運動」を参加理由とする参加者の存在を確認し（4-1）、活動の性質や参加者の振る舞いがこれらの2つの参加理由を共存可能とする役割を果たしていることを明らかにしていく（4-2、4-3）

4-1 「運動」と「交流」

まずは本事例における参加者の参加理由がどのようなものであるのかを確認していこう。ラジオ体操は「だれでも」実行可能な体操として知られる。実際ほとんどのインフォーマントは、小学生時代から体操の仕方や内容を知っていたためにハードルを感じることなく体操に参加できたことを語った（4月22日フィールドノート）。

ところが、とくに熱心に体操に取り組み、ラジオ体操検定や指導者講習会にも参加したことのあるインフォーマントたちは、小学校時代に知ったラジオ体操といま行っているラジオ体操との違いをしばしば強調した。

全体的に全部動かす、そういう体操、トレーニングって〔ほかに〕ないんです。ラジオ体操が一番。そういう認識です。そういう認識になったのは、ラジオ体操やって、〔検定の〕2級やってからですよ。取って、今1級もそうだけど、そうなんだと思って。それまでは、小学校のときは学校の先生の体操見てやってるから、全然違うでしょ。目からうろこで。実際、ラジオ体操がこうなってるのを知ると。だからやるんならちゃんとやったほうがいい。（C氏インタビュー）

このように、体操自体は「だれでも」実行可能なものであっても、「運動」が参加理由として語られることは少なくない。たとえば、あるインフォーマントたちは「身体のどこがどう動いてるのかとか、分かったうえでやんないとね」、「ほんとは、きちんと動かすことが大事だからね。みんな適当やってる人多いけど……」と調査者に語った（4月23日フィールド

ノート)。これらのことから、何人かの参加者は、周囲と比較して「きちんとやる」ことに特別な意味を見出していることがわかる。

根津神社では、このような熱心な参加者の多くは白色のジャージを着用している。これらの白ジャージはラジオ体操連盟から支給されたものである場合や、周りに合わせてプライベートで買ったものである場合など様々だったが（4月22日、同月23日フィールドノート）、その着用は参加理由が「運動」であることを明示する意味をもっているように観察された。ラジオ体操はゴルフやテニスなどと違って勝敗や対戦相手が存在しないものの、全身の筋肉や関節を動かすという性質のために「きちんとやる」姿勢は周囲から区別可能なものとして表れやすいようである。

しかし他方では、体操そのものよりも、ほかの参加者たちと歓談することなど、「交流」のみが参加理由であるように観察される参加者もいる。実際、あるグループは体操中であってもベンチに座ったまま歓談を続けている（5月4日フィールドノート）。そのなかには、ほぼ毎日来るのにほとんど体操には参加しないような参加者もあり、彼らが「交流」を理由に「場」を訪れていることが推測される。

ここまで見てきた通り、ラジオ体操が行われる「場」には、「運動」と「交流」の両方の参加理由を確認できる。これらの参加理由の存在自体は統計研究会（2009）もアンケート調査から明らかにしているが、本事例は同じ活動現場にも一見すると相反するような2種類の参加理由が共存することを示している。ラジオ体操の「緩やか」さを踏まえれば、このようにストイックに「運動」を突き詰める参加者と「交流」に重きを置く参加者の両方が同じ集まりにいるようなケースは少なくないと考えられる。そうであれば、そうした「場」がどのように成立しているのかが問われなくてはならない。

4-2 2つの参加理由を許容する活動の性質

では、2つの参加理由はどのようにして共存することが可能となっているのだろうか。観察や聞き取りからは、ラジオ体操（会）のいくつかの特徴が、異なる参加理由を許容することに結びついていることが明らかになった。

そうした特徴のうちの1つは、全員が同じタイミングで体操に取り組むことである。つまりラジオ体操には、テニスやゴルフのようにプレイヤーと観覧者との役割を交替するタイミングがないため、決められた動きをすべきタイミングと何もしなくてもよいタイミングとはっきり区別されている。このような特徴は、体操そのものは集中して行うが、体操外の時間には参加者どうしの交流も楽しみたいという姿勢を許容し（A氏インタビュー）、真剣に体操に取り組みたい人にとっても気楽な歓談が邪魔にならないような環境を構成している（C氏インタビュー）。

また、所要時間が極端に短いことも、そのような特徴として挙げることができる。ラジオ体操そのものの所要時間は3-4分程度であり、みんなの体操から第二までを通して行っても15分程度にしかない。そのため「運動」が参加理由であると語るインフォーマントにとっても、せっかく来たのだから体操だけで帰ってしまうのではなく、その前後の時間を使って周囲との会話を楽しむ時間くらい取ろうという気持ちが生まれるようである（5月29

日フィールドノート)。

これらのことから、「運動」と「交流」の参加理由をとくに区別して考えていないという参加者も多い。実際、それらの理由は流動的なものでもあり、現在は参加者の中でもっとも熱心に「運動」を追求しているように思われるC氏も、検定などの機会を通して徐々にラジオ体操の奥深さに気付いていったが、最初のうちは明確な目的意識を持って参加していたわけではないことを語った(C氏インタビュー)。

ほかにも2つの参加理由が結びついているような例が観察された。先述の通り、ラジオ体操は短い時間内で全身の関節と筋肉を動かす。しかしながら、一方ではゴルフやテニスほど激しくはなく、他方でウォーキングやハイキングなどと違って、体操中に自分の前方や周囲に並ぶ参加者の動きが見えやすいという特徴がある。次の語りが示すように、この特徴はお互いの体操をチェックすることにも繋がっている。

一緒に体操してる人がいつもより腕上がってなかったりすると「あぁ、この人調子悪いのかな」って思ったりね。(5月27日フィールドノート)

このような形で周りの参加者の体操を気遣うことは、その人に話しかけるためのきっかけや話題にもなっているのだという(6月5日フィールドノート)。このことは「運動」と「交流」の理由が必ずしも厳密に分けられるものではなく、「運動」に関する話題が「交流」のための資源としても活用されることを示している。

次に、体操会としての特徴について検討しよう。「運動」をストイックに突き詰め、お手本として中央で体操を行っているC氏は、体操会で指導部という役職を任されていたことがあるのだという。しかしその際、他の参加者の体操に違和感を覚えるようなことがあっても、外に出てきてくれること自体の方が大事だからという理由で、正しい体操の仕方を指導するようなことは敢えてしないようにしてきたと語る。また、C氏は新型コロナウイルスの流行を機に、思うところがあってこの指導部の役割を退いたそうだが、調査時点現在も変わらずお手本として中央で体操をしている。このC氏の例は、「場」における振る舞いが会として与えられた役職からかなり自由なものであることを示している。

また、会計係として名簿管理や会費の集金を担当するB氏も、会のことをあまりよく知っているわけではないし、とくに役職のことを気にしたことがあるわけではないと語った。この名簿はかつての参加者がつくり、現在も参加者の人数が多いことからその取りまとめのために残されているものようである。だが、それらがたとえば出欠を確認したり連絡を取ったりするために使われたことはないという。実際、それらの運用を担当するB氏自身が「もし出欠をとっていたら来なかった」と語っている(B氏インタビュー)。

一方で、夏休みに子どもたちが参加する際には、参加率に応じて菓子などを与えることもあるために、その出欠が積極的に確認される場合もあるのだという(4月23日フィールドノート)。このことから、継続的・日常的な参加者たちと夏休みにのみ時限的・イベント的に参加する子どもたちとはその参加理由が異なるため、出欠確認のように集団としてのルールを想定させる行為が両者に違う働き方をしていることが推測される。

このように、役職を任されている参加者も「場」への参加理由にばらつきがあることを理解したうえで、他の参加者に対して役職を意識した行動をとることは避けている。ここまで見てきたような体操（会）の活動の特徴は、「場」への参加理由が異なったり、流動的であったりすることを許容するものであるといえる。

4-3 2つの参加理由を許容する振る舞い

続いて、これらの2つの参加理由が参加者の「場」の使い方とどう結びついているのかを検討しよう。先行研究（村本 1999）は、ラジオ体操には決められたポジションがないにもかかわらず、参加者の体操位置が「なぜか自然に決まる」という語りがインフォーマントから得られたことを紹介している（村本 1999: 181）。本研究では、このような参加者の配列の仕方が、先に見た参加理由の違いと密接に関連していることがわかった。

根津神社における参加者の配列は、図1のように、お手本となるC氏を中心・最前として、白ジャージを着用して熱心に体操に取り組む参加者層10名ほどが列をつくり、他の参加者たちがその外側（点線の範囲）から彼らを取り囲むような形になっている（C氏や白ジャージの参加者たちは、南東の方を向いて体操している）。白ジャージの参加者たちは、それ以外の参加者からお手本として見られる位置に進んで立ち、体操を行っている。



図1 根津神社ラジオ体操会の配列（地理院タイルをもとに著者追記の上で作成）

反対に、端の方で体操をする参加者は、「運動」へのモチベーションが低い傾向にある。たとえば、ふだん境内の端の方で体操しているインフォーマント D および E は、そこに訪れる理由が、体操前の時間に境内に散歩で連れてこられる犬をみんなでかわいがることだと調査者に言い切った。そのようなやり取りの後、更に以下のようなやり取りが続いた。

調査者：「白いジャージ着てる人たちみたいに、真ん中出たってやらないんですか？」

インフォーマント D：「(笑いながら) 私たちペーペーだから」

インフォーマント E：「そうそう」

調査者：「あ、そんなものですか？」

インフォーマント D：「いやぁ全然ね」(4月28日フィールドノート)

ここで自らを「ペーペー」と称したインフォーマントは、実はこの体操会に参加して20年と参加歴が長く、会のこともかなり詳しく知っている(7月29日フィールドノート)。しかし、自分たちの体操位置を説明する根拠としては、参加年数や事情通であることよりも体操に対するモチベーションの低さが選ばれている。これらのことから、参加者は自らの参加理由に即して体操位置を選び、配列を行っており、そのことは同じ「場」においても異なる参加理由の共存を可能にするある種の棲み分けのような役割を担っていることが推測される。

本節の分析を通して、ラジオ体操には「運動」を理由に集まる人々も多いが、「運動」にまつわることを話題にしたり、参加理由に基づく服装や配列による棲み分けが行われたりすることで両者が共存し、「交流」を行うことができる「場」になっていることがわかった。ただし、ラジオ体操に訪れる理由は必ずしも「交流」や「運動」のような分析的なカテゴリーには適さないものも含まれる。次節ではそのような参加理由もくみ取るために、活動現場の空間的な性質を検討したい。

5 地域のなかの「場」(2)——神社境内の意味に着目して

本節では「場」への参加理由のうち、とくに参加者たちによる空間への意味づけや、それを踏まえた振る舞いに着目し、それらが「場」の維持にどのように繋がっているのかを明らかにする。1節で触れた二重の空間的な性質を踏まえ、まずは根津神社境内という敷地に内在的な性質(5-1)、続いてその場所が人々の生活圏というより大きな空間的広がりの中にもっている性質(5-2)の順に検討しよう。

5-1 「場」としての境内

根津神社の境内は、昼間には子供たちや親子連れが遊んでいたりと、地域の祭りの会場として使われたりするという点で、オープンスペースとしての性質も持っている。ただし同時に、空き地や公園ほど自由度が高いわけではないことから、そこでの振る舞いには一定の配慮も求められる。この点を踏まえ、ラジオ体操の活動が神社境内でどのように維持されているのかを明らかにすることが本項の課題である。

まず、根津神社の近隣で生まれ育った何人かのインフォーマントが、神社境内を単にオー

プンスペースであるという以上に、古くから親しまれてきた場所として捉えていることを取り上げたい。たとえば自らを「土地っ子」と称する A 氏は、根津神社の境内は木のぼりをしたり斜面を段ボールで滑ったりするなど、小さな頃からの「遊び場」として親しんできた空間なのだという（4月24日フィールドノート）。C氏も、他に遊べる広い空間が少ないなか、「〔根津神社で〕鬼ごっこしたり、やぶこいだりして遊んでたから。やっぱり慣れ親しんでる所で育ってるから」として、神社境内への昔からの愛着が、現在のラジオ体操への参加にも結びついていることを語った（C氏インタビュー）。これらの語りは、神社境内のような神聖な性質をもつ空間も、近隣の人々に親しまれることで、集まって活動しやすい場所として受け止められていることを示している。

他方で、神社境内のもつ神聖さを配慮した振る舞いも数多く確認された。たとえば根津神社ラジオ体操会では、元旦に、体操の参加者で初詣を行って、御神酒を飲み、奉納してから年始1回目のラジオ体操を行っているのだという。A氏は、これらの活動は体操会が境内をあくまでも「借りている」に過ぎないことを思い出させる契機にもなっているのだと語る（A氏インタビュー）。実際、何人かの参加者は毎日、体操開始よりも早く会場に訪れ、参拝・賽銭をしてから体操に取り組むなど、神社への配慮を見せている。以下のフィールドノートからの引用は、そのような振る舞いを示す典型的な例である。

玉垣〔＝神社の周囲に張り巡らされた石の垣。その1本1本に奉納者の居住地・名前が掘られている〕に「ここは私専用なの」と言いながらFさんがやってきて、脚をかけてストレッチを始めた。Fさんは私に「玉垣はストレッチを行うのにちょうどいい高さ、くぼみ」と笑いかけ、しかし本堂の方を向き直って「罰当たらないかしら」とも言う。筆者が「いやいや神様もみなさんが健康でいてくれた方がうれしいですよ」と返すと、彼女が毎日5円か10円賽銭を行ってから体操に参加しているという話を聞く。彼女は笑いながら「利用料としてね……でも本当に罰とか当たらないかしら、この（玉垣に名前が書かれている）人に申し訳ないよ」〔と言った〕。（4月23日フィールドノート）

このように参拝、賽銭、奉納などの行為は、境内をラジオ体操の会場として使用することについて各人なりの納得を示すことに繋がっている。また、それだけでなく、参拝や賽銭を毎日するインフォーマントには、そのついでという形でラジオ体操をルーティン化している人も多いようである（7月29日フィールドノート）。これらの例は、神社という空間の性質を踏まえた参加理由や振る舞いが活動への持続的な参加にも結びついていることを示している。

ここまで、根津神社が「遊び場」のように捉えられることと、ある種の神聖さが重視されることを検討してきた。そのどちらも強調したA氏の語りが見えるように、参加者は必ずしもそれらを矛盾するものとして受け止めているわけではない。むしろ、神社境内は人々に親しまれる空間としての性質と神聖な空間としての性質を同時に持っており、その両方が参加者がそこに集まり続ける理由になっていると考えられる。

5-2 散歩の動線

続いて、根津神社境内がより広い空間のなかでどのように位置づけられているのかを検討したい。神社の神聖さを重視する参加者も、「遊び場」としての親しみを語る参加者も、その多くは共通して根津神社が参拝や交友にとって訪れやすい位置にあることに言及した。

とくに聞かれたのは、根津神社が散歩やウォーキングの経路上に位置することである。何人かのインフォーマントは、自宅から会場まで歩くことを朝の散歩として捉えていると語った。また、18年前に根津に転居して以来ずっと体操に参加し続けているある参加者は、当時、地域について知るために出掛けていた散歩の途中でラジオ体操会の存在を知り、それをきっかけに体操に継続的に参加するようになったと語っている（4月29日フィールドノート）。

散歩やウォーキングは、「交流」とも適合的なものだといえる。たとえば参加者のなかには、体操後、自宅に直帰するのではなく、遠回りしながら帰路を共にする仲の良いグループもいる。そのグループに同行した際には、最大13名が連れだって、あえて帰宅方向とは逆の出口から神社を出発し、お喋りをしながら帰っていく様子が観察された（5月5日フィールドノート）。

同時に、散歩やウォーキングは「運動」とも適合的なものである。A氏によれば「体操を散歩と兼ねている参加者が多く、体操が終わるとみんなそれぞれの散歩コースへと散っていく。体力によって坂のあるコースを選んだり、そうではないコースをえらんだりする」のだという（4月21日フィールドノート）。実際にウォーキングとラジオ体操の両方を行っているある参加者は、持病のリハビリとして意識的に毎日7000歩歩くようにしており、ラジオ体操もその一環として参加していると語るなど、それらをセットで捉えているようである（4月22日フィールドノート）。

このように、根津神社が人々にとって訪れやすい空間に位置づけられている性質は様々な参加理由に結びついているといえる。このことは、新型コロナウイルス感染症の流行下には、参加者の振る舞いに複雑な影響をもたらした。

2020年4月、新型コロナウイルス感染拡大に伴う緊急事態宣言が発令された。A氏は会長として、体操会の活動を中断することを決定し、そのことを参加者に周知したという。しかし、活動中止の初日には、いつも通り根津神社に集まろうとしてしまう参加者が少なくなかったようである（A氏インタビュー）。その当日、会としてではなく個人で体操を行おうと根津神社を訪れたC氏は、その様子を次のように語った。

〔活動が中止になった日、〕自分たちでも毎日行ってることだから、ちょっと行って、ちょっと体操して帰ろうかみたいな人たちはたくさんいたんだろうね（中略）。〔その人数は〕30から40ぐらいはいたんじゃないかな。（中略）僕は隅のほうで、表立ってやるんじゃないで池の隅のほうでやってただけど、やっぱりさすがにそれにならって、みんな集まってきちゃったんで、それもまづかったな。（C氏インタビュー）

両氏へのインタビューでは、多くの参加者が、密集することがないために中断も要請されないウォーキングや散歩と一緒にラジオ体操を行う習慣があり、そのために活動中断に即座

に至らなかったのではないかという予想も語られた。

一方、緊急事態宣言解除後には、根津神社が散歩の経路に組み込まれていることが活動の再開に貢献した。A氏は次のように語る。

〔活動休止を〕解除するときには、何日からって〔根津神社の境内に設置されている〕掲示板に書いて、それで開始しました。(中略) 皆さんも私と同じようにいつも散歩コースで近所の人たちがしょっちゅうお参りしながら。神社って所ですから、みんなお参りに来るから(中略) だからそれがあって一斉にすぐ始まりましたね。(A氏インタビュー)

ここまで見てきたように、活動がなかなか中断されなかったり、早急に再開されたりしたことの大きな要因は、その場所が人々の自然と集まるような空間であったことである。3節や4節で言及した体操会の名簿には、参加者の電話番号や住所も記載されているが、活動の中止や再開にあたって連絡網や回覧板のような連絡手段が使われることはなかったという。参加を強制しない「緩やか」な「場」が維持されるためには、人々がその空間を訪れやすい場所として意味づけていることが重要となる。

6 結論

本稿ではここまで、集団としてのルールが緩く、メンバーシップが無くとも定期的に参加できる「緩やか」な集まりがどのように維持されているのかを、活動とその現場の空間的な性質から明らかにしてきた。とくに本研究では「緩やか」な活動の典型的な事例として、文京区根津神社の境内で行われているラジオ体操の活動現場を選び、参与観察とインタビューを行った。調査をもとに「場」への参加理由として(1)「交流」、(2)根津神社境内の空間的な性質に着目し、それぞれが参加者の「場」における振る舞いにどう表れ、「場」の維持にどのように結びついているのかを分析し、考察してきた。

その結果、(1)人々が参加理由の違いに基づいて自然と棲み分けを行ったり、体操の相互チェックを会話の資源として用いたりすることで、活動現場が運動だけでなく交流を行える場所として維持されていることがわかった。また、(2)神社境内という空間が、集まって活動できたり、ルーティン的な参拝や散歩の途中で人々と簡単なコミュニケーションをとれたりする場所として意味づけられていることもわかった。

本研究で検討してきた「場」の事例は、ルールやメンバーシップに依存しない「緩やか」な人間関係、地域の人々が親しみを感じている神社境内という空間、ラジオ体操というだけでも参加しやすいルーティン的な活動が、それぞれ分かちがたく関連しあうことで成立している。人々が自然と集まれるような「場」をつくり、維持するためには、そこでの人々の振る舞いを、地域という広がりも含めた空間的な性質も踏まえて検討する必要があるだろう。

とりわけ今日では、社会福祉政策などを中心に、人々が安心して集まれる「居場所」づくりの実践が試みられている(厚生労働省 2019)¹²¹³。とくに新型コロナウイルスの流行を経て、生身の人間が集まって活動することの重要性には改めて注目が集まっている。これらの実践にとっても、人々がなぜ・どのような空間に集まり、活動がどのように維持されるのか

を示した本稿の知見は有効な手がかりとなることが期待できる。

付記

本研究の調査は東京大学大学院の講義「文化情報人間学特論」で行われた演習をもとにしています。調査結果の一部は日本社会学会地域部会で報告を行う機会も得ました。ご指導くださった藤田結子先生、研究報告にコメントをくださった先生方、また学会報告に先立ち内容について議論していただいた Reading Circle of Urban and Regional Studies の参加者の皆さん、査読をご担当いただいた新雅史先生と阿部真大先生、そして研究にご協力くださった根津神社ラジオ体操会の皆さんと文京区役所のお二人に心より感謝申し上げます。

注

- 1 ラジオ体操の他にも、公園などで同じようにして行われている体操、エクササイズや、地域サロンでの集まり、ジャズ喫茶でのセッションなどの例を想定できる。本稿で取り上げるのはラジオ体操(会)の特徴ではあるが、その知見はこれら別の活動にも適用することができるだろう。
- 2 ラジオ体操の指導者講習や検定を実施する NPO 法人であるラジオ体操連盟の公式 HP に登録されているものだけでも、全国に 2100 件以上ものラジオ体操会があることを確認できる(全国ラジオ体操連盟の公式ホームページ <https://www.radio-exercises.org/> 最終アクセス 2022/03/01)。また、ラジオ体操第一と一緒に、補助体操、運動強度のより高いラジオ体操第二、運動強度のより低いみんなの体操なども行われることが多いようであるが、本稿では理解に齟齬が生じない限りこれらをひとまとめにしてラジオ体操と表記する。
- 3 高齢者の社会的孤立が懸念されるコロナ禍の現在、地域にとってのラジオ体操の重要度はとくに増していると考えられる。たとえばコロナ禍における高齢者の生活変容を検討した渡邊(2021)や松岡(2021)などでは、彼らの地域的な繋がりやの拠り所の 1 つにラジオ体操が挙げられている。
- 4 先行研究の調査事例からも、ラジオ体操会が町内会そのものでもあるような場合、ラジオ体操会の運営に町内会が関与している場合、両者が全く関係しない場合など、ラジオ体操会と町内会との関係性にはかなりの幅があることがわかる(町内会ではなく子ども会である場合もある)(統計研究会 2009: 122-78)。町内会が活動に大きく関与するケースは多いように思われるが、そのようなケースは町内会研究の範疇に含まれるものであり、本稿はむしろ、それらの地域組織の後ろ盾がないにもかかわらず活動が維持される「緩やか」な集まりに焦点を絞って分析することを目的にしている。
- 5 統計研究会の報告書は、現代のラジオ体操を扱った研究としてはもっとも浩瀚かつ詳しいものである。ラジオ体操を社会学的な関心から扱ったその他の研究蓄積としては、主に学会報告(小林・遠藤 2011; 外村・土井・安東 2015 など)や、簡易保険加入者協会による調査報告(簡易保険加入者協会 2013)などがある。いずれの報告でも統計研究会が提示した議論と同様の知見が見られる。このほか、ラジオ体操は体育研究や保健衛生の分野(西林 2007; 今井・加藤・竹田 2015 など)や、社会史(権 2021; 黒田 1999)でも扱われている。
- 6 このように「コミュニティ」概念がルーズに用いられる事態は、統計研究会にのみ限った問題ではない。たとえば、スポーツとコミュニティとの関わりを扱うコミュニティ・スポーツ論の動向を整理した伊藤・松村(2009)は、同分野ではコミュニティ概念が十分に定義されないまま使用され続けてきたことを指摘している(ラジオ体操がスポーツとして括られることは少ないかもしれないが、ここではラジオ体操も心身の満足のために身体を動かすという点ではスポーツに含まれることを考慮し、もっとも関連度の高い文脈としてコミュニティ・スポーツ論の動向について触れた)。
- 7 繰り返し指摘されてきたように、社会学におけるコミュニティ概念に一意的な定義を見て取ることはほぼ不可能であるため、ここでは地域社会学においてそのもっとも基本的な要件として言及されてきた共同性を挙げている(倉沢 2002; 玉野 2012)。また、コミュニティ概念の要件としては、共同

性と並んで「地域性」が挙げられることも多い。本稿では第1節で述べたように、人々どうしの繋がりに限定されない側面を把握することを目指しているため、「地域性」という言葉で繋がりの側面を強調してしまいかねないコミュニティ概念の使用を避ける。この点については本稿が依拠する武岡の議論（武岡 2017: 16-31）にも詳しい。

- 8 武岡の地域研究の他にも、コミュニティ概念の相対化を図りつつ「場」概念を構築しようとした例として天野英美の研究ノート（天野 1978）を挙げるができる。天野はレヴィンなど社会心理学における蓄積も含め、かなり詳しく学説の整理を行っている。ただし、その整理をもとに経験的な研究を展開しようとした試みが見られないことから、本稿では武岡の議論を参照することとした。
- 9 本調査の過程で根津神社ラジオ体操会の名簿整理作業に携わり、会長の許可を得て参加者名簿を参照している。この名簿によれば、2020年度時点での登録参加者数は162名であった。また、5節で言及するように、同体操会は元旦に参加者で初詣を行っているが、その際に参加者に振る舞われる御神酒、および記念品として渡されるタオルが、会費のほぼ全ての用途であるという。
- 10 注9と同じ名簿によれば、丁目単位では31区域からの参加者が確認できる。
- 11 正確には、文京区には根津神社ラジオ体操会を含む11のラジオ体操会が存在し、それぞれの会場の代表者から構成される文京区ラジオ体操会という合議組織が設置されている。この文京区ラジオ体操会は、他のスポーツ活動団体と並んで文京区体育協会に加盟している。
- 12 「居場所」に関する議論は、「社会的弱者」と呼ばれる人々の包摂的支援（阿部彩 2011）から、社会規範から逸脱してしまった人々の心理的な安全を確保すること（阿部真大 2011）まで多岐に渡るため、それらを一概に論じることは控えなければならない。ただし、本稿の知見は、「居場所」づくりにとっても、その現場が地域にとってもつ意味を踏まえる必要性があることを示唆するものではあるだろう。この点についての更なる議論は別稿を期したい。
- 13 たとえば厚生労働省（2019）は、行政主導で開設した健康体操教室や、困りごとを住民同士の互助で支え合う住民ボランティアの運営などを紹介している。ここでは明確な目的を持つ仲間どうしの活動を「居場所」づくりの好事例として取り上げたくうえで、他自治体が類似の政策を立案・実施することを推奨している。しかし、このような「政策移転」は、事例ごとに関与するアクターや利害関心が異なるため、必ずしも上手くいくわけではないことも既に指摘されている（松浦 2010）。これに対して本稿の知見は、むしろ明確な目的意識を持たない人々が、その地域に固有の理由で自然と集まることの重要性を示唆するものである。

文献

- 阿部彩, 2011, 『弱者の居場所がない社会——貧困・格差と社会的包摂』講談社。
- 阿部真大, 2011, 『居場所の社会学——生きづらさを超えて』日本経済新聞出版社。
- 天野英美, 1978, 「コミュニティ研究における『場』の視点」『社会分析』9: 90-6。
- 権学俊, 2021, 『スポーツとナショナリズムの歴史社会学——戦前=戦後日本における天皇制・身体・国民統合』ナカニシヤ出版。
- 今井あい子・加藤芳司・竹田徳則ほか, 2015, 「地域開催型ラジオ体操が高齢者の身体・心理社会面にもたらす効果」『作業療法』34(4): 393-402。
- 伊藤恵造・松村和則, 2009, 「コミュニティ・スポーツ論の再構成」『体育学研究』54(1): 77-88。
- 簡易保険加入者協会, 2013, 『市町村ラジオ体操連盟及びラジオ体操会の実態調査報告』。
- , 2014, 『ラジオ体操 DE 健康タウン ラジオ体操を利用した健康づくりの先進事例集』。
- 小林健太郎・遠藤幸一, 2011, 「社会的スポーツの再帰性——ラジオ体操・みんなの体操会の

- 地域への影響」『経済社会学年報』33: 268-70.
- 厚生労働省, 2019, 「これからの地域づくり戦略——集い・互い・知恵を出し合い3部作(1.0版)」(2022年3月1日アクセス, <https://www.mhlw.go.jp/content/12601000/000490353.pdf>).
- 倉沢進, 2002, 『改訂版 コミュニティ論』放送大学教育振興会.
- 黒田勇, 1999, 『ラジオ体操の誕生』青弓社.
- 松浦正浩, 2010, 「政策形成技法としての政策移転ガイドライン」『社会技術研究論文』7: 171-81.
- 松岡洋子, 2021, 「団地における新型コロナウイルス流行(第1波)後の変化とコミュニティ主導地域活動」『老年社会科学』42(4): 354-62.
- 村本由紀子, 1999, 「集団と集合状態との曖昧な境界——早朝の公園で見出される様々なアイデンティティ」箕浦康子編『フィールドワークの技法と実際——マイクロエスノグラフィ入門』ミネルヴァ書房, 175-95.
- 西林クニ子, 2007, 「ラジオ体操の効果」『大垣女子短期大学図書・生涯学習委員会』.
- NPO 法人全国ラジオ体操連盟, 2022, NPO 法人全国ラジオ体操連盟ホームページ (2022年3月1日アクセス, <https://www.radio-exercises.org/>).
- 玉野和志, 2012, 「コミュニティ」大澤真幸・吉見俊哉・鷺田清一編『現代社会学事典』弘文堂: 459-60.
- 武岡暢, 2017, 『生き延びる都市——新宿歌舞伎町の社会学』新曜社.
- 外村隆士・土井勉・安東直紀, 2015, 「自然発生的な『つながりの場』の発見: 賀茂川河川敷でのラジオ体操会の調査を通して」『関西支部研究発表会講演概要集 第13回』2015-07-18.
- 統計研究会, 2009, 『ラジオ体操・みんなの体操とコミュニティの形成(地域結束力)についての調査研究報告書』.
- 渡邊大輔, 2021, 「コロナ禍における高齢者の生活再編と社会関係」『老年社会科学』42(4): 346-53.

(みやち しゅんすけ、東京大学大学院 学際情報学府 学際情報学専攻、
miyachi-shunsuke314@g.ecc.u-tokyo.ac.jp)
(なかの こうき、日本大学 文理学部 社会福祉学科、nakano.koki@nihon-u.ac.jp)
(査読者 新雅史、阿部真大)

Regional and Community Studies of Radio Exercise:

An Ethnography of a Loosely Connected People

MIYACHI, Shunsuke and NAKANO, Koki

There are “loose” gatherings that have less stringent group rules and do not require membership, but still allow for regular participation. The purpose of this paper is to clarify how such gatherings are maintained. In this paper, using radio exercises in the precincts of Nezu Shrine as a case study, we conducted ethnography from the standpoint of viewing the activity as inseparable from the spatial nature of the site. First, we found that the participants naturally segregated themselves based on the different reasons for their participation and used the mutual checking of the exercises as a resource for conversation. These behaviors maintained the activity site as a place not only for exercise but also for social interaction. Second, we also found that the shrine grounds were meant to be a place that enable people to gather together for activities and allowed for simple communication with others during routine visits and walks. The findings of this paper, which examine the persistence of “loose” connections in the area, in terms of the nature of activities and spaces, may have implications for the practice of creating “ibasho”.